

広島デルタを守る治水事業が戦後復興の礎となる

おおたがわ 太田川放水路



広島・山口・島根三県にまたがる西中国山地国定公園を代表する冠山（標高 1339 m）を源流とする太田川。この河口部の三角州に築かれた広島城下は洪水に悩まされ続けてきました。藩政時代、広島城中や城下に被害を与えた洪水は 66 回を数え、なかでも承応 2 年（1653）8 月の洪水では、城下の各所で堤防が決壊し橋は全て流失しました。侍屋敷はじめ城内三の丸まで浸水し、死者は 5000 余人と記されています。

このとき浅野藩が行った治水対策は、城側の堤防を 9 寸（0.3 m）から 8 尺（2.8 m）高くするという「水越し」というものでした。その後、この時定めた兩岸堤防の高低差は各河川の堤防差として固定化され、『広島藩御覚書帖』に書かれています。このほか白島の水制工事や川掘りの義務付け、水害防御用の植林等、数々の治水対策が行われました。今も白島に祀られている八剣神社は、京橋川右岸の堤防が度々切れるので、人柱の代わりに福島正則が秘蔵の名剣八振を埋めて修築したことによると伝えられています。

また、明治から昭和初期にかけての記録では 4～5 年毎に大水害に見舞われています。特に大正 8 年（1919）7 月 4 日に発生した大洪水では、市内の主要な橋 10 橋流失、床上浸水 260 戸、床下浸水 2351 戸という大被害が生じました。

昭和 7 年（1932）、この洪水を期に 7 本の市内派川のうち西側の山手川と福島川を利用した放水路で洪水を流す改修計画が立てられ、昭和 9 年 4 月から河口部の浚渫、築堤、護岸工事が進められました。しかし、戦時下のため次第に予算は削減され、遂に昭和 19 年（1944）工事は中断されました。

原爆投下により一面焼け野原となった広島は、追い打ちをかけるかのように枕崎台風などで洪水被害を受け、昭和 21 年に放水路工事の再開が決定されました。しかし、地元関係者から放水路計画の見直しの要望も強くあるうえに、放水路の予定地は被災者が居住し、食糧難のため耕作地となっていました。工事を再開するためには多くの問題がありましたが、放水路計画の再検討や関係者の努力により、ようやく 26 年頃から再開されました。

当時、中国地方でも最大規模の工事として、大型の機械を多数導入して進められ、放水路には次々と新しい橋が架けられていきました。昭和 32 年からは国鉄（現 JR）可部線の付け替え、36 年からは放水路の要所園水門、大芝水門の工事も開始されました。そして、待ちに待った昭和 40 年 5 月、祇園・大芝水門の完成で通水式が行われました。

近世から行われてきた広島城下を守る治水は、内務省から建設省へと引き継がれた太田川放水路事業が集大成といえるのではないのでしょうか。洪水に悩まされ続けた広島の人々にとって放水路は悲願でした。通水式の 2 ヶ月後、7 月 23 日に洪水に見舞われましたが、太田川放水路は微動だにしませんでしたし、未曾有の災害といわれた昭和 47 年 7 月豪雨、平成 17 年 9 月台風 14 号出水ですら、浸水面積、被害家屋とも最小限にとどめて広島デルタを守りました。太田川放水路が現在の姿になり半世紀になろうとしています。原爆によって壊滅的な被害を受けた広島でしたが、洪水に怯えることなく復興という大事業を成し遂げることができたともいえます。

■太田川改修計画平面図



工事中の太田川放水路（昭和 37 年）
終戦前後の中断を経て再開され、大詰めの方分点付近の工事が始まった頃。



太田川放水路（平成 24 年）
大芝（左）、祇園水門（右）分岐から下流を望む。手前は祇園新橋。